

チャンスあるいは脅威としての自由

ロータ・シュナイダー
訳 阿南成一

目次

序言

- 一、自由、それはチャンスか脅威か
 - 二、異なる見方の生じる理由
 - 三、自由は誰を、あるいは何を脅かすか
 - 四、変化に反対しない者は誰か
 - 五、変化に反対する者は誰か
 - 六、自由はつねに新しい可能性を開く
 - 七、自由と「門外漢」
 - 八、自由へのチャンスとしての特別の公職者
 - 九、神学的に見て自由はチャンスか脅威か
 - 十、自由の最終目的とそこに至る道
- 訳者あとがき

序言

親愛なる兄弟たちへ

ケルン・カトリック司教団は、我が国に起こった現実の政治的出来事を考えるための小冊子として「チャンスあるいは脅威としての自由」というテーマを選びました。すでに第二バティカン公会議は、「人間の行為には人間自身の判断と責任を伴う自由があり、強制によってではなく義務の意識に基づいてこの判断と自由を行使しなければならぬ」（「教書・信教の自由について」一）ことを表明しています。しかし、次のような場合には、人間

がこの責任ある自由を得ることはほとんどありません。特に「生存条件の苛酷さのために、人間としての尊厳を保つことができず、神と隣人に奉仕するという使命を果たすことができな場合、あるいは、人間が極端な貧困に生きている場合には、人間の自由はしばしば限られたものとなり、逆に快適な生活に満足し、〈孤独な独裁〉のなかで自己を見失っている場合には、自由は墮落したものになる」(GS31註(10)参照)。当司教団が今回のテーマの著者に選んだロータ・シュナイダー教授は、正当にもこの著作において、我が国におけるごく最近の政治的展開を見て、再統合された我々の祖国の人々ができるだけ早く等しい生存条件を獲得するために、可能な限りの努力がなされるべきである、と結論されています。そのためには、当司教団の連帯行動が期待されるようになります。

この大きな共通の課題を共に果たそうとする意志が目覚めてはじめて、このことは成功しうるのです。カトリック教徒としてはさらに、人間の作った法律や社会制度だけでは、人格の尊厳や人間の自由を教会に託されたイエス・キリストの福音によるような仕方では保障することはできないということを知らなければなりません。人間の社会的自由はすべて、神の自由由来しています。個人や社会の自由が脅かされている所では、結局神が脅かされているのです。私は、すでになされたあなた方の努力に感謝するとともに、神の御心による導きを信頼してこの仕事を果たされるよう、未来に向けて一層の努力をされることを、皆様呼びかけたいと思います。

一九九一年一月三十一日

ケルン大司教

ヨアヒム・マイスナー枢機卿

一、自由、それはチャンスか脅威か

「いかなる壁“MAUER”もいつかは崩れる」という落書きに示されるように、ベルリンのコンクリートの怪物の西側では、一九八九年十一月九日以前からすでに批判的な意識が散見されていた。それが今、偶然にも十二月二十二日から二十三日にかけての夜、西側に書かれたこの言葉を知るはずもない東側の人々が、まさにこの言葉の書かれた場所で、コンクリートの一片とともに“MAUER”という言葉のうち後の二文字を削り取ってしまった。そしてさらに偶然が重なり、崩壊個所の不規則性からUの一部が壊れ、テレビを見ている人々にはLという文字に見えた。これによって、最初に書かれた言葉(それが「いかなる壁もいつかは崩れる」というものであったことは確かめられている)が、「いかなる境界線MALもいつかは崩れる」という全く違った言葉になったのである。しかも、それがこの出来事自身による改竄であることは、雨水がこの言葉の後に感嘆符のような割れ目を作ったことが示している。

この象徴的な出来事は、十一月九日の出来事とともに、自由とは何であるか、より正確には何でありうるかを示す「寓話」と言ってもよいのではないだろうか。これらの夜に、笑い、抱擁し、喜びの涙を流し、歓喜する人々を見た人は、自由がいかなるチャンスを開くかを直接経験したのである。しかも、二十八年もの間自由が禁じられてきたその場所。チャンスとしての自由、それは人間にとって根源的な経験である。

しかし、最初の数日ないし数週間の熱狂もようやく衰えはじめている。それは、人々が、酒の席や来るべき選挙への準備のなかで、獲得された自由がチャンスであるというより、脅威であることを知るようになったからである。この自由は、これまでの福祉や貨幣価値の安定性、職場、年金、住宅市場などを脅かし、大幅な増税なし

には財政的に成り立たない。簡単に言えば、我々の「繁栄するドイツ」にとって忌まわしいものである。だから、我々が長年の努力によって獲得してきたものをこの自由が押し流してしまわないように、我々は今我々自身でできるだけ早く、我々の福祉を守る「社会的防波堤」を構築し、「新たな西側の堤」を作らねばならない。

一九九〇年一月、日本の投資家だけで十七億マルクを超えるドイツの株を購入しているが、これが今後必要となる資金を共に負担しようとするものでないことを、「酒の席で世界の改革を説く者」もテオ・ヴァイゲル連邦大蔵大臣も十分気づいてはいないようである。彼は、一九九〇年二月、「分割が続く場合の政府援助」に代わる「統一のための投資」と考えれば、財政的にもむしろプラスになりうると、述べている⁽¹⁾。だがいずれにせよ、ある人にとってチャンスと見える自由が、他の人々を脅かすものであることを、まず確認する必要がある。

二、異なる見方の生じる理由

あるものをより正確に見ようとすれば、それを擁護する者と反対する者によって評価が分かれる理由を明らかにする必要がある。チャンス⁽²⁾の面を強調する者は、多くの可能性をとらえて、新しい状況とともに作り出して行くこうとする行為者として自分を見ている。これに対して、脅威に脅える者は、自分を一連の経過に委ねられた一種の「自動機械」のように見るとともに、その経過は決して自分の力を変えることのできない自然災害のように襲ってくる、と考えている。まさにここに、この議論の「正体」がある。一方にとっては、作り上げていく可能性であるものが、他方にとっては、ほとんど無防備なままで投げ出されている人間が被るべき不可避性なのである。

だが、この対立は、一方が他方よりもよく知っているといった単なる日常的な現実問題よりもはるかに深い問題があることを示している。この問題に関して明らかになることは、ある人間がその深い観点においていかなる根本的態度を取っているか、ということである。すなわち、世界を良くすることに参加し、それに貢献するため計算可能な行動に取って挑戦する人間であるか、それとも、むしろ控へ目に自分の能力を隠すことを好む人間であるか。後者の、冒険を好まず「安全」を保持する態度は、イエスによって「悪い怠惰な僕」として批判されている(マタイの福音書第二十五章二十六節)。それゆえ、キリスト教徒にとって新たな可能性に対する自由とは、提供された政治的、社会的なメニューから任意に選択するという自由以上のものであり、そうしたメニューだけでは十分ではない。というのは、自由とは神が我々に与えた決定的な能力であり、自由によって初めて我々は「神の創造の完成に創造者とともに参与する」(『Populorum Progressio』27)ことができるからである。さもなくば、我々は、全く全能の神の操り糸に操られる操り人形になってしまい、神の呼びかけに答えるパートナーとはなりえない。自由が誤って用いられることがあるということは、確かに正しい。誤用を避けることは大切だが、例えば包丁を誤って用いる可能性があるからといって、包丁を正しく使用することをも禁じたり、全く使うべきではないということにはならない。「乱用は有用性を排除しないabusum non tollit usum」とは、非常に古い神学上の認識である。

三、自由は誰を、あるいは何を脅かすか

我々はこの中で、アーレンスバッハの世論調査機関が妊娠後期の胎内にいる胎児にインタビューするための全く新しい方法を開発した、と想定してみよう。「あなたは生まれ出ることを望みますか、それとも胎内に止まるところを望みますか」という質問に対して、九九%の胎児は「すべてはあるがままにあるのがいい。出産はそれに関

わるすべての人に負担であり危険をもたらすから」と答えるかもしれない。しかし、これらの胎児に対して、生まれなでいることの危険性を十分に納得させることはほとんど不可能である。自然がその創造者の意志にしたがって、そうした根本的自由、すなわち生まれな自由をはじめから与えていないことは不思議なことではない。なぜなら、未熟な人間はそうした自由をもつほどに成長していかないからである。そうした自由は、彼らにとつては根本的に過剰な要求なのである。

しかし、しばしば見逃されているのはまさにこの点である。等しい年令で等しい教育程度の人でも、人格的成熟度は生育状況によつては全く異なりうる。そこには、それぞれの生活史におけるさまざまな関係が影響している。若い人々が今日でもなお、「あらゆる種類の指導者」に、自分に芽生えた自由を喜んで譲り渡すことがあるのは偶然ではない。それはなるほど「良いこと」でもありうるが、「盲目的な理念」、ひとつのイデオロギーであることもめずらしくない。一九九〇年一月十三日に五十八歳で亡くなった「バグワン」のまわりには、金と人格的自由を彼に委ねる若者集団が集まっていたが、それは日常生活のストレスを受けることなく自分と周囲の人々が一つになる、すなわち幸福になるという「胎児的な憧れ」によるものである。努力し、学び、労働することは余計なことであり、目標に至るための道を通ることなく目標に直接到達しようとする憧れである。「私たちがここにいることは素晴らしいことです。私たちは三つの小屋をたてましよう。」(マルコ福音書第九章五節)。これは、人がもっていると感じているものを保障する「幸せの時」という古い誘惑である。

「所有物の保全」ということが、自らに与えられた能力を「活用」しようとしないう者たちの隠されたスローガンなのである。ここで問題なのは決して単に物質的な価値だけではなく、愛すべき、大切なものすべてである。「無報酬」という場合でも、人は実は自分自身の最深の幸福と精神的に不動のものを求めている。私は故郷に残し

た九十九匹を失うかも知れないのに、なにゆえ一匹の羊を追って荒野に出て行かねばならないのだろうか(マタイ福音書第十八章十二節参照)。そうした「所有物の保全」ということよりも、自由の限界に関する議論が優先する。所有物の保全という観点は、自由という「手段領域」において本来何が重要か、という決定的な問いから目を背けさせるものであるからである。我々が新たなものを構成する可能性がここにあるにもかかわらず、それを放置する場合、すなわちこの問いを避けようとすることによって、その可能性を認識しようとしないう場合、我々はいかなる不作為の罪を犯すことになるのだろうか。

四、変化に反対しない者は誰か。

我々はまず、自由によつて可能となる変化を嫌う者の「集合的なメルクマール」が存在するかどうか、を問うてみよう。飢えた者、渴いた者、凍えた者、すなわち何か悩みをもっている者はすべて、その状態をそのまま維持しようとは思わないであろうということは、容易に推測できる。こうした人々にとつて、「何も起こらないことは、現状よりもはるかに悪いことである」がゆえに、彼らは変化する可能性に特別の関心を示す。ガン患者やエイズ患者が全く新しい治療手段や方法を自ら試してみようとする理由についても、同じことが言えよう。それが病気を治してくれるか、あるいは少なくとも病気の進行を遅らせてくれるかも知れないからである。こうした人々は、変化のなかにチャンスを見る。

五、変化に反対する者は誰か

しかし、うまくいっている人、健康に恵まれ、裕福で、教育も教養も十分にあり、「安穩に」暮らしている人

は、一体いかなる状態にあるのだろうか。そうした人はなぜ変化に賛成しなければならないのだろうか。その生活は全く快適であり、すべてがそのまま最高なのだ。全くすべてが満たされている。

忘れ難く、愛すべき教皇ヨハネ・パウロ一世は、死の少し前、ローマの拝謁室にイタリアの子供を召し、その口を通して居並ぶキリスト教徒たちに教会の革新の必要性を示唆しようとして、次のような会話をしている。教皇はその子供に「君はどの学年に進みたいか」と尋ねた。すると子供は「一年生です」と答えた。「それはなぜだね。」とても親切な先生がいらっしゃるからです。「それは結構、だが、君はすぐに二年生になりたくないかならずだ。」いいえ、そんなことはありません。教皇が驚いて「なぜ、なりたくないのかね」と尋ねると、「はい、もし二年生になると、あの先生と別れなければなりません。あの先生は一年生の先生ですから。」と答えた。すると、教皇はこの考えにうなずきながら言われた。「それは結構だが、君もいつかはもっと上の学校に行きたいだろう。子供は「いいえ、あの先生と別れたくありませんから」。教皇はそれにうなずきながらも、さらに言われた。「いつか君も、男として家族を持ちたいだろう」。それでも子供は「いいえ、私は一年生のままでいいのです。あの先生がやさしいから」と答えた。教皇はこの質疑を終えるにあたって「君は私にいいことを教えてくれた」と、含蓄のあることを言われた。この短いシーンはテレビを通じて世界中に伝えられた。

このエピソードは、自分の周りがかまうかかまわっていない人間がどのようなメンタリティをもち、どのような精神、どのような内面的態度をもつかを教えてください。「満たされた」人間は、あらゆる変化を拒否する危険性をもって「富んでいる者が神の国に入るよりは、ラクダが針の穴を通る方がもっとやさしい」(マルコ福音書第十章二十五節)とされている本当の理由はここにあるのではないだろうか。神の国は自由の国であり、我々はみなそこに至る途上にあるのだが、我々のもつ諸々の能力を隠すことによつてそこに到達することはできない。より

大きな自由に向かう途上にある者は、恒常的な革新(メタノイア、ペレストロイカ)なしには不可能である。⁽²⁾すなわち、今日の世界の現状を改革する必要はないと考える者は、今日の状況があたかもすでに神の国であるかのようにふるまっているのである。それは、今日の発展段階を全く過大に評価し、未来にある神の国を過小評価していることになる。イエスが「満たされるようになるがゆえに、飢え渴いている人」(変化を求める人)は幸いだと言った(マタイ福音書第五章六節)のも、偶然ではない。彼らは「宿無し」(第一コリント人への手紙第四章十一節)であり、未来に宿を求めているがゆえに、つねに途上にある。

六、自由はつねに新しい可能性を開く

しかし、より良き世界を目指して努力する者は、改良の方向を見極めてそれを実行に移すために、ただ個人的に努力するだけでは足りない。社会的な枠組みもまたより良き解決への探求を容易にし、促進するものであるということも、彼にとつて重要なはずである。

精神科学の領域を含めて、画期的な発見者や芸術家、研究者たちの経験を振り返ってみると、彼らに生じた「一瞬の火花」(コンラート・ローレンツは、「ひらめき」と言っている)は同時に集団や「チーム」に飛び火するのではなく、全くその逆であることがわかるはずである。まず誰かに「認識の閃光」が起こり、彼が幸運であれば、やがて彼の近くにいる誰かが、そこに基本的に全く新しい認識があることに気づくようになる。しかし、自信をもってその両者に共にノーベル賞を贈ることができるといふほど、発見の初期の段階で明確な一致があることは稀である。

天才は、同僚や近くの者によつて歓迎されるといふよりは妨害され、嘲笑され、論難されてきたし、そうされ

るのが普通である。黙殺することができないと、彼は「排除」される。イエスがはりつけになったのも偶然ではない。集団や社会は、その成員に対して同質性を要求する圧力をもつ。今日でも、共同体の任務の認識に関して同僚から信頼されるためには、「中庸を保ち」「目立たないこと」が大切である。こうした問題状況を解決するための制度的方策として考へるのは、勿論その有効性に限界はあるが、ドイツの大学教授の「身分保障制度」である。彼らは刑事犯罪を犯したり憲法に違反した行為をしない限り、生涯その地位に止どまることができる。社会によって保障されたこのように比較的大きな自由によって、彼らは学問に専念することができる。しかし、学者たちが互いにこの自由を制限しあっていることについて、マックス・プランクのような信頼できる学者が当事者としての自らの体験に基づいて次のような証言をしている。「新しい科学的真理とは、それに対する敵対者がそれを納得して受容したことを表明するという仕方で浸透していくものではない。むしろ、敵対者が次第に死に絶え、初めからその真理を信じている新しい世代が登場してくるによって浸透していくのである。」と。

七、自由と「門外漢」

我々がみなすでに知っているような偉大な発見が「門外漢」によってなされてきたこと、そして今もなされていること、しかもその人が多くの人々に称賛されているわけではないことは、驚くには当たらない。科学的発見の歴史はまさに、この主張を裏付ける例に「満ちている」。「当初、ガス麻酔の発見者と認められなかったホーラス・ウェルズ (Hoaras Wells 1815-48、一八四四年に笑気による抜歯を行った) が四五年にホーストンの手術室で彼の発見した方法を提案したとき、教授は彼を無視し、学生たちは嘲笑した。多くの場合、無知は、言葉の真の意味で、悲惨なものである。ウェルズが門外漢であり、彼の才能をまじめに認めなかったがゆえに、世間は彼を過

小評価したのである。」⁽⁵⁾ また、「最も熱心な天体観測者」の一人であり「天王星の発見者」であるウィリアム・ハーシェル (Frederick William Herschel 1738-1822、イギリス領であったハノーヴァーに生まれ、五七年にイギリスに移住、六六年頃から天文学に関心をもち、八一年に天王星を発見) が、本当は優秀な音楽家であったことを、今日一体誰が知っているであろうか。ついでながら、生地ドイツから十九歳でイギリスに移住してから後に、彼は成功した。

近代的な現代社会においても、さまざまな領域において、公式に専門家と認められた人々が、予言的確ないわゆる「素人」を見下している例をいくつもあげることができる。⁽⁷⁾

八、自由へのチャンスとしての特別の公職者

同じように制度もまた、特にそれが特別の公職への「ベルトコンベアー」としてのみ開かれていて、大きな自由への動きを促進することができない場合には、これまで述べてきたことが、個人的な意味しかもたないと誤解されるかもしれない。

(1) 教皇選挙とペレストロイカ

歴史的な転換はたいてい、諸々の原因がからまりあって生じるものであり、化学反応における触媒のように、ある決定的な主要因があつて、それが社会的な出来事を推進するといったことはめつたにない。教皇選挙とペレストロイカをそうした様々な因果関係によって結びつけることもできよう。何といても自由は基本的にチャンスと脅威との緊張関係のなかで発生するのであるが、その緊張関係を今度の教皇選挙の結果に関して思弁的に説

明してみたい。

イタリア人以外の者、すなわちイタリアに生まれたのでも、イタリアで育ったのでもない者をローマの司教に選ぶことは、四百年にわたるローマの伝統を破ることになる。枢機卿たちはそれをよく知っていた。そうした伝統のなかで「外国人」がローマの司教になりうるだろうか。人々は果たしてそれを望んでいるのだろうか。ことのほか伝統を重んじてきたローマカトリック教会は、難しい問題につきつけられた。イタリア人を選ぶという、確立された尊重すべき伝統を破るべきかどうか。それによって、未来に向けて何が先取りされるのか。そうした根本的転換はそもそも正当化できるのか。枢機卿たちは、将来これがどのように発展しどのような結果をもたらすかを、最初から見通すことができるのか。その決定によって生じるすべての事態について、それがマイナスの面以上にプラスの面をもつかどうかを、前以て確かめるべきだという、哲学者ハンス・ヨナスの要求⁽⁸⁾（これはすでに言葉の上で矛盾している）に従っていたならば、彼らは伝統「からの自由」を得ることはできなかったであろう。ヨナスに従う代わりに、選挙会場の人々は、神の御心が将来も教会を導いて下さるということに信頼して、全く新しい伝統「への自由」を選んだのである。そして、聖ペトロの後継者に、Karol Wojtyła（現教皇のポーランド名）というスラブ人が初めて選ばれた。それは、これまで教皇職についていたことが一度もない人間集団からの選抜であり、二千年に及ぶ教会の伝統を破る出来事であった。保守主義者には全く考えられないことであった。だが、その伝統から出ることも許されることになったのであり、ローマに集まった枢機卿たちは、一つの価値考量を行うことになった。すなわち、天秤皿の片方に伝統「からの自由」を載せ、他方に新しいもの「への自由」を載せたのである。

Krakau（ポーランドの町）の枢機卿ならば信心深いポーランド人の観点から西と東の対立の溝を緊急に埋める必要があることを知っているはずだという理由で、教皇選挙会議は彼を選んだのだ、といったあまりに思弁的な推測をする必要はない。むしろ問われるべきなのは、一〇五四年の破門以来分かれてきたキリスト教の教義を再びローマと結びつけることのできる教皇を選ぶことが、時の命令ではなかったか、ということである。彼なら、東のキリスト教徒がキリスト教の精神を保持していることをよく知っており、合同の公会議を推進することができであろう。一年間ロドス島で行われた十四人の総主教とローマカトリックの神学者たちとの会議には、ラテインガ―枢機卿も出席していた。こうして、信仰と人間の敵であるコミュニズムは最終的に葬られたと言っているのではないか。こうした考え方が、選挙の六日前に、絶対的「多数派」となり、スラブ人を教皇の地位に就けることができた。彼は、大きな楽観的ヴィジョンをそなえた特別の人間である。確かに、一九七八年十月十六日の時点において、目標とされていた革新がどのように行われるか、またこれほど急速に起こることを予測しえた者はいない。しかし、それは熱望されていた肯定すべき発展であり、枢機卿たちも伝統に結びついたものとして高く評価した。「からの自由」が「への自由」になった。「未来に向けての変化」が神の御心を信頼して是認されたのである。

(2) 東側ブロックの解体——ポーランドの連帯

あの月曜日の夕方七時少し前、Krakauの枢機卿が教皇ヨハネ・パウロ二世に選ばれたことが直ちに彼の故郷に伝えられると、すべてのポーランド人たちは抱き合って喜んだ。これが、精神的な意味での「連帯」が誕生した瞬間であった。教皇がその故郷を訪れたとき、百二十万から四百四十万の人々が祝賀ミサに集まった。これは、聖ペテロ広場の三つか四つが満員になるほどの数である。こうして「連帯」の理念はさらに大きな民衆の力を得た。

モスクワでは、ポーランドに戦車が投入されるのではないかと、危惧された。ローマにおけるこの「変革」(Libero)は、世界に、あのプラハの春のときよりもはるかに悲観的な観測をもたらした。今日から見ると、モスクワが武力介入を思い止どまったことが、コミュニズムの最初の「組織的失敗」であった。

だが、KGBは、一九八一年五月十五日に『労働について』(Laborem exercens)という社会回勅が発表されることを知ったとき、「中立」を装うために、トルコ語のうまいブルガリア人を刺客として送り込んだ。そして、回勅が発表される二日前の五月十三日、聖ペテロ広場に銃声が響いた。しかし、すぐにKGBに嫌疑をかけられたために、またしても赤軍のポーランド進攻は阻止された。一九八一年九月十四日、回復した教皇が回勅を發した。それは、非常に重要なものであった。そこには、誤解されようもないほど明確に、時の命令として「連帯」の必要性がうたわれていた。それがまさにポーランドにおける「連帯」であった。

こうした状況は、モスクワの中央委員会内部にどんな反応を起させたか。もし、ポーランドに戦車が組織的に送り込まれていたとすれば、死をもって中央委員会から排除された人々に代わって將軍、情報將校、補給將校らの軍人が昇進していただろう。この場合、そうした人々こそ有用だからである。しかし、事態は全く違った。中央委員会では、社会学者や経済学者、政治学者が重用され、「頭の堅い者」の代わりに「実務家」が重席を占め、「鷹」に代わって「鳩」が増えた。中央委員会は、こうして次第に「柔軟派」がその多数を占めていった。この多数派によって初めて、ゴルバチョフという新しい公職者が選ばれた。中央委員会のこうした状況の変化がなかったなら、彼が選ばれることはなかったであろう。

今や、ペレストロイカは「第二段階に点火された」。ハンガリーは、「シチュー・コミュニズム」(イデオロギーに基づくのではない、日々の生活に即した実践的なコミュニズムの形態。ハンガリーの典型的な民族料理からこの名が付けられた。)を強めた。ブタペストやワルシャワ、プラハのドイツ大使館に東ドイツから多くの人々が亡命したのは、こうした動きの兆候であった。ライプチヒ、ドレスデン、ベルリンにおける「月曜日デモ」と福音教会によって、一九八九年十一月九日、ベルリンの壁は開放された。「いかなる壁もいつかは崩れる——いかなる境界線もいつかは崩れる」。こうして、大きな解放の過程が動き始めたのである。

九、神学的に見て自由はチャンスか脅威か

さて、事態がこのように解釈されようとしても、それはそのように解釈することもできるといっただけだ、と反論されるかもしれない。すなわち、大きな教会のヴィジョンが、ここでは詳しく説明されていない。例えば東側ブロックは軍備拡張競争によって経済的に「完全に息切れ」してしまっただけで「破産状態」にあるといった、他の事情がともに考察されていないのはなぜか。なにゆえに、こうした多くのことが影響して世界規模での政治情勢を良い方向に向かわせていると言わないのか。また、神学的に教会内部ではなお自由が問題にされる余地があるとすれば、その点でも異が唱えられるであろう。

これについて、聖書は何と言っているだろうか。第二コリント人への手紙第三章十七節には「主の靈のあるところには、自由がある」とある。この聖書の言葉は、上に述べた、自由とは創造性にとつての第一の前提であるということと一致する。「創造的精神よ來れ」と祈ることで、教会は聖靈を創造的精神として崇拜しているからである。聖靈とは創造的精神であり、我々は、聖靈がこの創造性を働かせるのは聖靈の臨在が自由をもたらすことによつてである、と付言することができる。このことはまた、我々がすでに見てきたように、学問を必要とする聖靈の贈り物のうちに「学問と認識という贈り物」があることは驚くにあたらない。学問はより深い真理を求め

るといふ目的をもつがゆえに、ここで述べた考え方は、ヨハネ福音書の次の言葉と完全に一致する。「真理の御霊が来るときには、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」(ヨハネ福音書第十六章十三節)。「真理があなたがたに自由を得させるであろう」(ヨハネ福音書第八章三十二節)。自由と真理は動的な仕方互いに要求しあうのである。

したがって、ただ単にすでに獲得したものを維持しようとする配慮に基づいて神の創造力を拒否しようとする者、あるいは自分の能力を試みるよりも隠すことを好む者は、「聖霊に対する罪」というきわめて深い罪を犯しているものであり、その罪は、それを棄て去ってしまわない限り許されない。

十、自由の最終目的とそこに至る道

ここで主張された自由と真理の創造的過程は人間に限られ、それはすべて「純粹に精神的なもの」であって「單純で汚い労働の世界」の外にあるものであるかのような印象を与えるかもしれないが、決してそうではない。ヨーロッパの守護の聖人(Patron)である聖ベネディクトの「祈れ、そして働け」という標語は、ここでも考慮に値する。だから、第二バティカン聖職者會議は正当にも、次のことを強調している。「男も女も、その労働を通じて神の作品を發展させていることを確信してよい。それゆえ、キリスト教徒は、人間の精神と力が生み出したものは神の力に対立するとか、理性をもった被造物は創造者に敵対するものである、といったことを信じるものではない。逆に、人類の勝利は偉大な神の印であり、測り難い神のおぼしめしの成果であることを確信する。」⁽⁹⁾

これによって、人間の探求と労働の産物は、非常に高く評価されようになる。ローマ人への手紙に書かれているような、初期キリスト教徒の未来に対する望みは、今初めてより深く理解される。パウロはそこで言っている。

「被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されている」と。現代的に言えば「物の世界にも自由がある」。換言すれば、自由を行使するために人間がすでに持っているもの、すなわち知性の幾分かは、いわゆる「死せる物たち」にもあるということである。これはばかげた、現実離れたことのように聞こえるかも知れないが、決してそうではない。まだ始まったばかりのことであるとはいえず、我々はずでに、この發展過程を共に経験しているではないか。例えば、「考えるラジオが望みの番組を自分で探します」といった広告を考えてみればよい。あるいは、「ミュンヘンは知的な家具を生み出す」とか「ABC自動プレーキはレーザーの運転技術を超えた」ということも言われている。また、我々はみな、「赤外線によって制御された自動ドア」や安全速度を超えたときに鳴るボルボの音、スーパーマーケットの火災探知機、住宅のドアや電話についた音の合図を知っている。これらはほんの手始めであり、まもなく「話すコンピューター」ができるだろう。聞くことも話すこともできるコンピューターも、原初的なものはすでに存在している。今日これらは、自由のチャンスをより深めるためのものである。「コンピューターという同僚」によって人間は、非常に多くの点で自由のチャンスをより一層利用できるようになる。また、特に意図的な自由の乱用によって引き起こされる脅威をほとんど不可能にすることも容易になる。⁽¹⁰⁾

労働に関する素晴らしい回勅(Laborem exercens)のなかで、ヨハネ・パウロ二世は、ここで述べたことと同様のことを、次のように書いている。「労働によって創造作用に参加しているという意識が、さまざま領域で創造作用を引き受けるための最も深い基盤となる」⁽¹¹⁾と。だが、我々は残念ながら、労働を通じて創造作用に参加するという点について、ほとんどの人々が全く意識していないに等しいことを確認しなければならない。それはおそらく、我々の罪である。神の意志に従って、創造作用を完成させるべきこと、「真理と自由の国」が我々によって

共に実現されるべきこと、これこそ、我々が今日、そして今後とも拡大すべき自由のチャンスである。と同時に、本来の脅威もここにある。だがそれは、祈りと労働によって、神の望まれる可能な限りの自由において、最終的に克服すべき脅威である。

〈注〉

- (1) 一九九〇年二月二十五日付、レーゲンスブルグの司教区誌三頁、ワイゲルの「ドイツ統一は分割より安い」をも参照。
- (2) W・ウェーバー「教会による社会教育」一九七五年、二七頁、L。シュナイター「教会員による構造調査のための神学的反省」一九七八年、二四頁参照。
- (3) W・ナスティンチック「点火する火花」一九八四年、一〇頁参照。
- (4) M・プランク「科学的自伝」一九四八年、二二頁。なお、H・E・リュック「クルト・レビンの位相幾何学を例とした科学の進歩の集団的過程の意義について」『ゲシユタルト理論』第十一巻第四号（一九八九）二四六頁をも参照。
- (5) F・シッファー「ミュンヘンの哲学者の愚かさの跡」『ミュンヒナー・メルクーア』一九九〇年二月八日、三頁。
- (6) Time-Life-Bucher 編集部「銀河、宇宙旅行」一九八九年、一八頁。
- (7) L・シュナイター/H・E・リュック「計画立案過程における素人判断と専門家の判断」『集団行動』十三号（一九八九）、三二九―三三二頁。
- (8) H・ヨナス「責任原理：技術文明の倫理」一九八四。
- (9) 第二バチカン公議会公文書：Gaudium et spes, Rom 1965, Z. 34。
- (10) J・H・ミューラー・クリンク「Spicos（話すコンピュータ）に付けられた名前」は十分後に答えた『ライオン・エルクーア』一九九〇年三月九日、二二頁。
- (11) 一九九〇年三月十日、十七時四十五分から十八時三十分の西ドイツテレビ「なしうることの魅惑」という番組を参照。特に、コンピュータが作り出す想像空間のなかに人間がそれによって自分で動くことができる「データ・スーツ」の考えを。

- (12) ヨハネ・パウロ二世の回勅“Laborem exercens” 一九八一年、二五号。
- (13) ヨハネ・パウロ二世の回勅“Redemptoris Missio” 一九九〇年、十六項を参照。「イエスの人格のなかにすでにこ

の国があり、それは神秘的な仕方ではイエスと結びつくことによって、人間と世界に次第に備わってくることを、若者は知っている。」

訳者あとがき

本訳文は、レーゲンスブルグ(Regensburg)大学(社会倫理担当)教授ロータ・シュナイター(Lothar Schneider)博士がケルン司教団の要請に応じて同司教団の選んだテーマについて執筆した小冊子Freiheit als Chance und Bedrohungを訳したものである。初めそれはKKV (Koeln Katholiken Verband) 刊行のシリーズの「1991」で一九九一年当初に発表され、のちに同教授著『燃える社会論』(Zündende Soziallehre, 180 SS, Verlag Friedrich Pustet, 1991) に収載されている。

先年ドイツは念願の東西統一という歴史的出来事を迎え、今後何をいかにすべきかの問題がドイツ国民のすべてに投げかけられた。その中の主要問題の一つが「自由」である。社会主義諸国の崩壊により自由が獲得されたが、まさに本小論のタイトルが示すように、自由は人間社会の発展のチャンスともなるし、また使い方を誤れば脅威ともなる。自由を正しく用い、貧富の格差をなくし、皆が人間の尊厳にふさわしい生活をする事ができるようにすることは、ひとりドイツ国民にとってのみならず、すべての国民、そして南北問題にとっても目指されるべきことである。このことを本小論から読者は学び知ることができよう。なお、本小論の中の「教皇選挙とペレストロイカ」のくだりは興味津々たるものがある。

最後に、本小論の翻訳に当たり、眼の不自由な私に代わり初訳をしていただいた青山治城氏に対し、深甚の謝意を表したい。

* 著者のシュナイダー教授の略歴ならびにその社会倫理については、本誌三二号の「労働——社会的に受容可能で流動的な——」に詳しく述べておいたので、それを参照されたい。